どこか遠くへ

yuneko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこか遠くへ

【Ｎコード】

Ｎ２３７３Ｔ

【作者名】

ｙｕｎｅｋｏ

【あらすじ】

アカデミーの図書室で青年アゼットと出会った少女ネルネ。「どこか遠くへ行きたい」青年のその言葉で、少女の物語は幕を開けた。ネルネとアゼットの不思議な関係と、精霊王との繋がりを描いた児童文学のようなファンタジー小説。王道です。縦書きで読むことを推奨します。

1―1　精霊王の夢

どこか遠くへ行きたい。

誰でも一度はそう思ったことがあるにちがいない。でも、実際に行動に移して、本当に遠くへ行く人は、ほんの一握りだ。

その理由は、学校だとか、仕事だとか、社会的な縛りが大半で、それらすべてを投げうって行動できるほど、誰もかれも強いわけではない。いや、ここで強弱を計るのは間違いかもしれない。すべて投げうつことが強いのか、その縛りに耐えてとどまり続けることが弱いのか、それを決めるのは、本人以外のものではないからだ。

アカデミー所属、士官科1年、ネルネ・ノリス

彼女は特に何かが秀でていているわけではなく、特別器量が良いわけでもない。

彼女の所属するアカデミーは、士官科・魔道科・法術科・騎士科と四つに分かれていて、その中でも、比較的裕福な家庭の子供は、士官科に所属する。いわば、未来のエリートというわけだ。

ネルネは公爵という王族に縁近い家に生まれ、十三になった年に、アカデミーの士官科に入学した。けれど、少女は勉強が苦手で、剣を振ることも苦手だ。

秀でたことがないというよりは、良いところがない。その上、ちやほや育ったというわけではないけど、少しふっくらしているし、肌が白いものだからそばかすも目立つ。肩につくかつかないかぐらいに切りそろえられた銀に近い金髪が、少女の丸顔をことさら際立たせていた。

少女を一言で表すなら、落ちこぼれ。けれど、周りも少女自身もあまりそのことを気にはしていなかった。最低限の授業と訓練を受けさえすればアカデミーは卒業できる。少女の両親も、公爵家の子とはいえ、十三番目の末子に当たるネルネは、アカデミーを卒業し

たという肩書だけあれば良いとしていたのだ。
少女、ネルネは日々その様なのんびりとした暮らしをしていたので、どこか遠くへ行きたい、などと考えたことも思ったこともない。しかし、ある青年との出会いで、少女の物語は思ってもみない方向から幕を開けることとなる。

ネルネの日課は決まっていた。
アカデミーでの授業が終えた後、寮へとすぐには帰らず、アカデミーの図書室で大好きなお菓子の本を見ながら、「これ食べてみたいなぁ」と想像に浸るのが少女の毎日だった。
アカデミーの図書室は、生徒なら誰でも利用が可能だが、校舎の末端にあるため、訪れる生徒は少ない。教室をふたつくっつけた程の閲覧室は、あまり広くもなく、校舎の末端というだけあって、静かだ。
書架には授業で使われるような資料が大半を占めているが、ぎっしりと詰まっている様子を見ると、その人気のなさが伺える。
「ネルネちゃん、ちょうど良かった。古書室からこの本をとってきてほしいんだ」
「はーい」
すっかり顔なじみとなった司書の手伝いも板についてくるほど、ネルネは図書室に通っていた。
司書は、穏やかな声音と落ち着きのある男性で、少女は司書を兄や、ともすれば父親のように慕っている。

図書室の奥にある司書室からこれまた奥にある階段を降りると、薄暗い部屋がある。貴重書が多く所蔵してある古書室では、本を傷めることのないように、日の光を遮り、湿度調整もしっかりとされていた。薄暗い部屋の中は、足元も見えないので、この部屋に行く時には、カンテラをあらかじめ持っていくことになっている。
カンテラの明かりに照らされ、壁一面に敷き詰められた書棚が顔

を見せた。その書棚は高さも天井につくほどで、ずっしりとした重い本や少女の手のひらよりも小さい本など様々なタイトルと大きさの本が収められている。

「えーと、３３０……『太古経済学』……」

ネルネはカンテラの明かりを頼りに、探している分類の書棚の端から辿る。

「あった！」

書棚の上の方に目当ての背表紙を見つけ、ネルネは棚に備え付けられているスライド式の梯子を合わせた。カンテラをそばにあった机に置くと、おぼつかない様子で梯子をのぼり、本の表紙に触れる。

突然、地の底からせり上がってくるような衝撃と揺れが、ネルネを襲った。

ネルネはその揺れに驚きながらも、とっさに掴んだ本と梯子を胸に抱え、やり過ごそうとした。しかし、少女の小さな手は、そのぽっちゃりとした体を支え切れず、少女は薄暗い床へと吸い込まれるように投げ出された。

ネルネは自身にくるだろう痛みを覚悟して、その深緑の目をぎゅっと閉じた。しかし、書棚にあった大量の本とともに落ちた少女の体に、想像したような衝撃は訪れることはなかった。

「あれ？　どうして？」

座り込んだその場所から、ネルネはまわりを見渡し、棚から落ちた本の海に自身がいることで、梯子から落ちたことを理解した。立ち上がろうとして、少女の体の下に、硬くもなくやわらかくもない何かがあることに気がついた。

「なんだろう？」

ネルネはカンテラに手を伸ばし掴んだ。不思議なことに、あれだけの揺れがあったにも関わらず、机に置いてあったカンテラがあの衝撃に倒れることなく無事だったことに、ネルネが気づくことはなかった。

少女はカンテラを翳す。

「え？」
ネルネは息を飲んだ。
「なに、これ？」
少女が敷いていたもの――　それは人だった。その体格から、どうやら男だということが解る。
けれど、人特有の温かみや、やわらかさがなく、その顔も血が通っていないかのように青白い。
まるで、それは生きていないように見えた。
「きゃあああああ！」
男の体の上に尻もちをついていたネルネは、うまく立ち上がれず、這うようにしてその場を離れた。

古書室を飛び出した少女は、司書室にいた司書に小さな体で飛びついて、
「先生！　お、男の人が、た、倒れてて、いきっ……生きていないの！」
あえぐように訴えた。
「ネルネちゃん、落ち着いて。ここは図書室だ」
司書はそれが当然の義務であるとでもいうようにネルネをいさめると、次はネルネの訴えに首を傾げた。
「古書室に男の人がいたのかい？」
ネルネは何度も頷いた。
「いいから見て！」
少女が司書の腕を引っ張って古書室に連れていこうとするので、司書は「今日は誰も古書室に入っていないはずだけどなぁ」と呟きながら古書室に足を踏み入れ、その目を見開いた。
「ネルネちゃん……これは一体……？」
「先生！　こ、ここにね。お、おお男の人が！」
古書室のその光景に絶句している司書の手を引っ張り、ネルネは自分が落ちた床に、男が倒れていた場所へ指をさす。自身はその目

に男の姿を映したくないのか、顔を背け、目をぎゅっと閉じ、その上に小さな手のひらを乗せていた。
「誰もいないよ」
「え？」
少女は司書の言葉に恐る恐る目を開ける。そして、指をさした先には、棚から落ちた本は散乱しているが、その中に男の姿を見つけられず、動揺が走った。
「うそ！　こんなのうそっこだわ！　だって、確かにここにあったの！」
いたと言わずにあったというあたり、少女は男を生きていないものとしてまるで死霊にでもあったかのように、司書には感じられて、この少女の混乱も思春期特有のものだろうと納得した。
「本当なの！　先生、私見たの！」
ネルネは本の山を崩して探したが、男の姿を見つけることは出来なかった。
「それより、これはどういうことだい？」
「え？　どうって……？」
「こんなに本を落としたことだ。ここには貴重な本ばかりあるって、ネルネちゃんも知っているだろう？」
司書が叱るように言うと、ネルネは首を左右に強く振った。
「違うの！　私じゃない。あの揺れで落ちたの！」
「揺れ？　揺れなんてなかったよ」
「本当よ！　すごく揺れたわ。ずしんってきて、だから私、本をとった後、梯子から落ちて、そうしたら男の人が……！」
息せきこみながらネルネは自分の身に起こったことを説明したが、司書はネルネの興奮を抑えるようにその小さな肩に手を置いて言った。
「解ったよ。本をたくさん落としちゃってびっくりしたんだね。怪我はない？」
「違うわ！　お願い信じて、本当に揺れたし、男の人が倒れていた

の！」
少女が地団駄を踏んで訴えても、司書はそれ以上には取り合わなかった。
「とにかく、本を全て棚に戻すまで部屋から出たらいけないよ。きちんと片づけるんだ。いいね？」
そう言って、ネルネを叱った。
「私じゃないのに……」
少女は唇をかみしめたが、優しいけれど同じだけ厳しい司書に、これ以上言っても無駄だと判断して頷いた。
「良い子だ。あ、それが頼んだ本だね」
司書はネルネの頭をひとつ撫でると、少女の腕の中にあったものを見つけた。ネルネはずっと自分が本を抱えていたことに今さらながら気付き、その本を司書に預けようとした。
「これは頼んでいたものと違うな」
「そんなはずない。きちんと……あれ？」
司書に渡そうとした本のタイトルを見て、少女は困惑した。

『精霊王の夢』

ネルネがあの時とった本とタイトルも分類も全く違うものだった。
「頼んだ本は後で僕が取りに来るから、これも片づけてね」
『精霊王の夢』をその手に戻され、ネルネは腑に落ちない気持ちのまま、本の海の中で立ちすくみ、頷いた。

1―2　とどかない声

「これで終わり！」
最後の一冊を棚に押しこむと、ネルネは手のひらを叩いて埃を払った。
あれから変な現象も起こらず、男の姿を見ることもなかった。
ネルネはカンテラを持って、古書室をあとにする。扉を閉める前に、一度だけ隙間からちらりと中を覗くが、やはりなにもいなかった。
階段というほどのものでもない数段の段差を上がりながら、ネルネはもう気分を浮上させていた。
「先生、きっとお菓子用意して待っててくれてるよね」
お手伝いの後にはいつもお菓子を用意されていたので、今回も少女はそれを期待しているのだ。
少女のそののど元過ぎれば熱さ忘れるという切り替えの早さは、ネルネの楽観的思考を表しているものだが、細かいことにこだわらないその大らかさは、唯一彼女が誇っていいものかもしれない。
「先生、終わりました」
少女が司書室に入ると、司書はそこにいなかった。
「図書室の方かな？」
司書室を抜け、図書室に繋がっている扉を開けた。
「あれ？　いない。どこに行ったのかな」
ネルネは司書を探すために図書室から廊下に出て、すぐに職員室の方へ体を向ける。
図書室から出たすぐ目の前にある窓から夕陽が差した。オレンジというよりはトマトにマーマレードを混ぜたような不思議な色合いの夕陽は、息をのむほどに圧倒するようだった。
ネルネは立ち止まり、その圧倒的な存在感の夕陽が、大好きなチーズケーキに見えてきて、本来の目的を思い出して窓から、そして

夕陽から視線を剥がし、ネルネは職員室の方向に走っていく。
誰もいなくなった図書室の扉から、カチリと鍵のかかる音がわずかにしたが、少女がそれに気付くことはなかった。

職員室につき、ネルネはその扉をノックした。
「あれ？」
少女は自分の見間違いかと思った。
ネルネは確かに今、扉にノックをしたはずだ。目の前のことが信じられず、少女はまた扉にノックをした。
「……どういうこと？」
ネルネの声が震える。少女はノックをした。それは間違いのない事実だった。だが、ノックをしようとしたネルネの手は、職員室の扉を突き抜けていた。
「なんで？」
扉は壊れたわけではないし、ネルネの手に痛みもない。ただ、ネルネの手は扉に触れることができなくなっていた。
少女は信じられないような気持ちで自分の両手を見つめた。手のひらを広げても小さい、いつもの自分の手だ。
ぐらりとネルネの体が揺れた。あまりに現実味を帯びていない出来事に、めまいがしたのだ。とっさに出た手が傍にあった壁を支えにしようとして、ネルネはその場に倒れた。
「なんで、どうして！」
少女は動揺して、その目を見張る。ネルネは壁を支えにしようとして叶わず、その向こう側に上半身が倒れ、壁を挟んで廊下側に下半身がある状態だった。つまり、壁をすり抜けていた。
職員室には何人もの教師がいたが、ネルネの悲痛な声を聴いたものは誰一人としていなかった。
動揺しながらもネルネは立ち上がると、教師に声を掛けた。あいさつはもちろん、質問もただの掛け声にも誰一人として反応することはなく、ネルネは思い切って彼らを掴もうとしたが、扉や壁と同

様、触れることができなかった。
少女は諦めて職員室から出ようと扉に手を掛けて、すり抜けたことにまた落胆した。
「どうしてこうなっちゃったんだろう」
ネルネの目から涙がこぼれたが、その涙すら床をすり抜け、涙を拭おうとした自分の手も、ネルネ自身をすり抜けた。

途方に暮れて中庭に出ると、何人かの生徒が談話をしていた。その中に、司書の姿もあった。
「先生！」
司書の姿を見止めた少女は、司書の元へと走った。ぶつかるはずの草木をもすり抜けたが、目の前しか見ていないネルネがそれを気にすることはなかった。
「先生！　私、変になっちゃったの！」
ネルネは司書が、自分がこうなったことへの解決策を考えてくれると信じて疑っていなかった。だから、他の人からは無理でも、司書からの反応が返ってこないなんてことも思ってもみなかったのだ。
「なんだい？」
そう司書が問いかけた相手は少女ではなかった。ネルネは強い失望を感じ、司書が問いかけた相手をみて顔をしかめた。
「だから先生、ネルネにあんまりお菓子与えるなよ」
少年と青年のちょうど中間くらいであろう少年が、親子ほど年の離れた司書にぞんざいな口をきくことに、少女はいつも憤りを感じていた。
「ガンタン」
少女は少年の名前を声に出して言ったが、ガンタンも司書と同様、その声に気付くことはなかった。
ガンタンは騎士科に所属している二歳上の上級生だ。黒に近い茶色の髪をして、同色の瞳の色は強い自信に溢れている。家は商家という庶民の出だが、アカデミーでの成績は優秀で、もう間もなくア

カデミーでの勉強を修了して、騎士として地方領主の騎士団に入団する予定だ。
「あれじゃあ、あいつはいつか子ブタになるぞ」
いつも少女を子ブタと馬鹿にするガンタン少年に、ネルネはその白い頬が怒りで朱に染まるのを感じた。
公爵家の末子にここまで言えるのは、それもひとえにネルネの人柄ゆえだ。ネルネは理不尽なことには異を唱えるし、公爵という家柄を笠にきていばったりすることもない。普通の少女だからだ。
「先生に変なこと言わないで！」
聞こえていないのを理解しているが、ネルネは叫んだ。いつもの自分の前でされる意地悪ならいざ知らず、いないところで悪口を言われるのがたまらなく嫌だったのだ。
「ガンタンなんて大嫌い！」
怒りがおさまらず、少女は続けて叫んだ。本当はそこまで言うことでもないとネルネ自身解っているが、今自分を取り巻く不可解な現象とも相まって、彼女の不安と不満を、ガンタンへの怒りで昇華させようとしていた。
「ん？　今、ネルネの声がした気がする」
ガンタンが眉を潜めて、ぐるりとまわりを見渡した。その視線が、少女の方に移り、ネルネは少年と目があった。
「が、ガンタン！　私に気付いてくれたの！？」
先ほど嫌いだと叫んだのにも関わらず、今度は嬉々として頬を紅潮させるネルネ。
「ネルネちゃん？　いないよ」
「……空耳か」
司書が少年同様まわりをみわたし、少女の姿を確認できず、少年に首を振ると、ガンタンは首を捻って、少女から目を離す。それから司書と軽い挨拶を交わし、中庭をふたりとも各々の場所へと離れていく。
「どうして！　お願い、ガンタン！　聞いているんでしょう！？

またいつもの意地悪なんだよね！？　私ここにいるのに！　ガンタンの馬鹿ぁー！」

少年の背中にネルネは必死に叫び続けたが、その声に少年が振りかえることはなかった。

1―3　奇妙な出来事

図書室へと向かう司書の後ろを少女は重い足取りでついていく。
「ずっとこのままだったらどうしよう」
少女は恐怖した。何も、自身にすら触ることができない。誰にも声が届かない。そしてなにより、大好きなお菓子を食べることができない。ネルネはやはりネルネだった。深刻な状況に直面しても、彼女の脳裏から甘いお菓子が離れることはない。
少女は考えた。勉強が苦手で普段悩むことの多くない頭で、この状況をネルネなりに必死に考えるとこにした。
「こうなったのって、いつからだっけ……図書室にいた時は……触れたよね。最後に触ったもの、なんだったっけ？」
状況を整理するために、ネルネは今日を振り返る。思えば奇妙な出来事ばかりだ。
「揺れて、梯子から落ちて……うん、男の人がいたのにいなかった」
古書室で少女の下敷きになっていた男の存在を、ネルネは幻とは思えなかった。少女は自身の手をまた見る。
「すごく冷たかった」
あの感触が未だ肌に残っているようで、少女はひとつ身震いした。
「でも、あの時にはまだこんな風になってなかったよね」
司書を引っ張っていって、状況を説明したのも記憶に新しい。
「そういえば、あの本……一体なんだったんだろう？　探してた時、あんなタイトルの本は近くになかったのに」
『精霊王の夢』というタイトルの本は、ネルネの探していた本と全く違っていた。今は本来あるべき書棚にネルネの手によって収められたが、それも不可思議なことの一つだった。
「そういえば……」
少女はふと、窓の外を見た。あの大きく丸い夕陽はもうなかった。代わりに少女の目に映ったのは、いつもの見慣れたオレンジ色の夕

陽が沈みかけていたところだった。
前を歩いていた司書の足が止まる。少女はそれにならって立ち止まった。
「図書室の扉を開けて、私は職員室に行った。それまでは触ることができたってことだよね」
図書室の扉を前に、少女は確信していた。
「全部、図書室からだ」
ネルネは行きついた答えを確かめるために、司書が図書室の扉を開けるのを待った。
司書は扉を開けようとして、鈍い音によってそれができないことに首を傾げる。
「おかしいなぁ。鍵が掛かってる。ネルネちゃん、帰ったのか」
その言葉に、少女は首を振って否定したが、もとより司書からはネルネの姿が見えていないので、意味がなかった。
「私、鍵なんて掛けてないのに」
最後に図書室を出たのはネルネだ。図書室には彼女の他には誰もいなかった。けれど、ネルネは鍵を掛けた覚えはないし、また図書室に戻ってくるつもりだったので、その必要もなかったのだ。
少女の訴えもむなしく、司書は元来た道を戻ろうとする。ネルネはそれに気付き、声を上げた。
「先生！　行かないで！　お願い、一緒に図書室に入ってよ！」
少女は司書の後姿を追い、古書室の時のように手を引っ張ろうとするが、伸ばした手もむなしく司書の腕をすり抜ける。ネルネは勢い余って、その場に崩れた。
「お願い！　ひとりにしないで！」
何か得体のしれないことが自身に起こっていることを、少女は解っていたし、その原因が図書室にあることも解った。だから、ネルネはこの状況にひとりでいることが怖かった。意思の疎通も触れることもできないけれど、いつも頼りにしているまるで自身の父親のように慕っている司書だけでも自分の傍で、この異変を一緒に見て

ほしかったのだ。
少女が叫ぶ声も、廊下に残響となって自分の耳に届くが、それが自身にしか聞こえないということを、ネルネはずっと前から解っていたのに、それでも、わらをも掴む気持ちで、少女は呼びとめようと必死になった。

日が沈み、廊下には月の光が差し込み始めていた。
少女は声を上げ続けて、喉に痛みを感じて、それが嗚咽に変わり、日が沈んだこの時間まで廊下に蹲ってずっと泣いていた。
「先生は鍵をあけるために一度戻っただけ」
ネルネはそう自身に言い聞かせていたけれど、それを確かめようと司書の後ろについていくことはなかった。
少女はゆっくりとした動作で立ち上がり、自分の頬を両手で叩く真似をした。
「お菓子、食べられなくなってもいいの！？」
ネルネの答えは決まっている。もちろん否だ。他にももっと自分を奮い立たせることがあるだろうに、ネルネはあえてそれを選んだ。
少女は図書室の扉の前に立った。そっと手を伸ばす。やはり扉を突き抜け、一瞬肩を揺らしたが、ネルネは思い切って足を踏み出し、その向こうへ飛び込んだ。

嗅ぎ慣れた紙の匂いに包まれたが余韻に浸ることはせず、少女は飛び込んだその勢いのまま司書室を抜けて、その奥の階段を駆け降りた。緊張していた少女は、図書室に入ってからずっと息を止めていて、古書室の扉を前にやっと息を吐いた。やはり長年の習慣なのか、扉を見るとすり抜けると解っていても、少女は手を伸ばす。
「あれ？　うそ……」
古書室の扉もすり抜けてしまうと思っていた少女は、その手に感じた扉の冷たさに、目を見張った。そのまま、扉の開閉の時の甲高い音を聴きながら、吸い込まれるようにして、ネルネは扉の奥、古書

室へと足を踏み入れた。

月の光も届くことのない古書室は、もう何も見えないほどに暗く、ネルネは自分の手を胸に抱いた。

なんの前触れもなく、コトンと何かが置かれる音が響いた。それに続くように、オレンジ色の明かりがぼやける。その正体は、少女がいつも古書室に来るときに使っていたカンテラで、その向こうに、影が伸びていた。

「だ、だれなの？」

カンテラの向こう、明かりに照らされたのは、ひとりの青年だった。

「あ、ああ……うそ……だって、いなかったのに！」

ネルネは怯えてその場に座り込み、傍にあった机の足に両腕でしがみつく。

「君は、いたことを知っていたじゃあないか」

青年は、靴音を響かせ、少女との距離を詰める。その顔をネルネは知っていた。

「だって、でも、いたのにいなくて……それで、そう！」

少女は体を震わせて、一番言いたくなかった言葉を口にした。

「生きていなかったのに！」

カンテラに照らされた青年は、その明かりで頬が夕陽色に染まっていたので、今は昼間の様な生気のない青白さは感じられない。けれど、少女はそれでも、あの冷たさを忘れることができなかった。

１―４　アゼット青年

全体的にひょろりと細長い印象を与える青年だった。体は勿論のこと、手足も長く、余計な脂肪はついていないとでもいうように細い。その腕を組み、彼は少女の叫びに首を竦めた。
「体に血が通っていて、心臓が動いている。そのことを生きるとするのなら、確かに僕は生きていないね」
世間話くらいの気軽さで、青年はネルネにとって、一番に重要だったことを告げた。
「い、生きていないってどういうこと？」
「それは、君の考える生きているという前提での話であって、僕は生きているつもりなんだけどね」
青年はネルネとの距離をまた詰め、座り込んで机の足を抱きしめていた少女の目の前に座り込み、視線を合わせる。
「僕は不完全な存在なんだ」
少女の方へ彼は手を伸ばす。ネルネがそれに短く悲鳴を上げて瞼をぎゅっと閉じたのを見ても、青年は問答無用で氷のように冷たいその手でネルネの手を取り、自分の心臓がある方の胸に押しあてた。
「……うそでしょう」
少女は、無理やりに押しあてられたその手から、青年の温もりも、心臓の鼓動も感じられず、茫然と彼を見上げた。
心臓が鼓動を打っていないのに、青年は確かにネルネの前で話し、その体を動かしている。ただ、触れた胸は呼吸で膨らむこともなく、近くで見上げたその顔は、やはり血の気がない。
「あ、ああ……あなた、し、しし死霊なの？」
丸い目をぽっかりと限界まで見開き、震える舌で、ネルネは青年に尋ねた。あまりに衝撃をうけ、少女の指先は、彼と同じように冷えて冷たくなっていた。
「死霊とは失礼な。僕はアゼット。妖精と人間のハーフだ」

「よ、妖精と人間のハーフ？　そんなの聞いたことない」
妖精は伝承に出てくる――　人に近くとも、人と相いれない存在だとネルネは知っていた。妖精は人知れない場所に住み、その姿を人の前に晒すことはない。妖精自体がネルネにとっては夢のような伝承上の存在なのに、その妖精と人間のハーフだと告げられても、少女には到底理解できるものではなかった。
「そうは言われても、僕という存在が確かにいるのだから、それを認めてもらわないといけない。僕らはこれから、それはそれは長い付き合いになるのだからね」
アゼットと名乗った青年は、物覚えが悪い生徒に教える教師のように、穏やかにそう言った。
少女は思考を停止しようとする頭を必死に回した。乾いた唇を震わせ、視線を彷徨わせる。しばらくそうしてから、喉をひとつ鳴らすと、ようやくアゼットに向き直った。
「始めから説明してちょうだい」
少女の瞳に光が戻ったのを青年は確認すると、その場に立ち上がった。
「説明するよりも前に、知ってもらいたいことがあるんだ」
青年はネルネの腕を掴むと、少女の体を引っ張り上げて立たせた。ひょろりと細長い青年と小さいネルネとの身長差は傍目に見ても明確で、ふたりを言葉で表現するなら、ちびとのっぽだ。
少女が促されるままにおぼつかない足取りで立ち上がったのを見ると、青年は、トンと少女の小さい肩を押した。
「え？」
肩を押した少女を前に、青年は自身の体を部屋の奥へと引いた。押されたネルネは、支えをなくし、その力に逆らえぬまま後ろへとたたらを踏む。悲鳴を出すこともできず、後ろの扉に叩きつけられるのだと、ネルネはとっさに青年の方へと手を伸ばしたが、少女から離れた青年は、すでに部屋の奥、ネルネの伸ばした手は空を切った。

「大丈夫だから」
青年は、少女に安心させるようにそう言ったが、ネルネの耳に届くことはなかった。

月明かりが奥から洩れているのを、少女は茫然として見上げた。ネルネは押されて、仰向けに倒れたが、その体に痛みはなかった。
ネルネの深緑の瞳には、司書室へと続く階段が逆さまに映り、そこから洩れる月明かりに、少女は息をついた。上半身を起こすと、扉に打つはずだった後ろ頭に手を添えようとして、ネルネは息を飲んだ。
「どうして……また」
自身に触れようとした手が、すり抜けた。これは、今日、彼女に起こった奇妙な出来事のひとつだ。
「さっきまで大丈夫だったのに……アゼット？」
少女は立ち上がり、古書室の扉に手を添えて、すり抜けるのを確認すると、その中へ入った。
「アゼット！　これはどういうこと！？」
入ってもなお、机や書棚に触れられず、青年の姿も見当たらない。ネルネは青年の姿を探して部屋の奥に進む。不意に、何かに躓き、少女は前へと倒れ転んだ。
「いたた」
躓いたということは、少女はもうあの現象から逃れたということだ。ネルネは、痛みに顔をしかめながら、自身が躓いたものを――
正確には人を見つけた。
「アゼット！？　大丈夫！？」
「大丈夫だから、耳元で叫ばないでおくれ」
ネルネはまたも青年を下敷きにしていた。倒れ、目を閉じた青年のその様子は、やはりネルネには生きていないように見えて、声を上げてその顔を覗きこむ。アゼットはゆっくりと目を開けると、その上に倒れこむ少女ごと上半身を起こし、苦笑を洩らした。

「一度目は尻に敷かれ、二度目は躓かれた。君は一体何度僕の上に乗るつもりだい？」
「そんなつもりはないのよ！　ただ、どうしてこんなところで倒れていたの？」
少女は、アゼットに支えられるまま周りを見渡した。特に何かあるわけでもない。けれど、青年は倒れていた。
「どこか具合でも悪いの？」
その顔色から、とてもじゃないが具合が良さそうに見えないが、ネルネは素直に青年を心配していた。
「いいや。どこも悪くはないよ。ただ、ひとつ君に謝らなくてはいけない。さっきは驚いただろう？　ごめん」
「そう！　私、とてもびっくりしたの！　それに、あれはどういうこと？　アゼットは、私がどうしてあんな風になってしまうのか、知っているの？」
怒るというよりは、困惑の色を濃くする少女に対して、青年は頷いた。
「とりあえず、図書室に行こう」
「ここでは駄目なの？」
「駄目というわけではないけれど、こんな薄暗いところで顔を突き合わせてする話じゃあないね」
青年は少女の手を取り、古書室を出ようとするが、扉を前に、ネルネは立ち止まった。
「でも、私……ここから出たら……またさっきみたいになるかもしれない」
声も物も全てすり抜けてしまうあの現象は、ネルネの心に恐怖を植え付けるのに十分なことだった。
「大丈夫。僕がいる限り、あれはもう起こらない」
アゼットに手をひかれるまま、ネルネは息をひとつ吐くと、頷いて古書室の扉の外へ出た。

１―５　魂の共有者

図書室の机にカンテラを置いたアゼットは、ネルネが椅子に座るのを見届けると、自分もその向かいに座わる。
古書室ではあまりに暗くてよく解らなかったが、月明かりの下で改めて見る青年は、やはり肌が青白く、ひょろりとしていた。灰色の髪に、薄い空色の瞳は、青年全体を薄く印象付けるが、その瞳には光がしっかりと映っていて、傍目には、心臓が止まり、呼吸すらしていないということに気付かないだろうと、少女は思った。
「なにがなんだか解らないの。突然、なにもかもがすり抜けて、自分にすら触れないの！　誰に声をかけてもみんな私に気付いてくれなくて、私、変だったの。おかしくなってしまったの……！」
少女は、ガンタンや司書とのことを思い返して、青年にその不安を訴えた。アゼットはそれに頷いた。
「始めは、１０メートル」
少女はその言葉の意味が解らず、眉根を寄せる。
「さっきは４メートルだった。最終的に、僕らの距離は４メートルに落ち着いたようだね」
「……僕らの距離？」
飄々として告げる青年に、ネルネは疑惑の視線を投げた。
突然始めた距離の話。古書室でのアゼットの奇行。部屋の奥で倒れていた青年と、部屋の外に出た自身との距離――　およそ４メートル。
「も、もしかして！　あれはあなたが原因なの！？」
机に両手をついて、ネルネは立ち上がった。それに大げさに驚いた素振りをして、青年は首を横に振る。
「僕が原因というよりは、僕らふたりが原因というべきかな」
「ふたりが原因？」
「そう。僕と君が４メートル以上離れると、あの現象が起きる」

「な、なんてこと……！」
ネルネは口を開けたり閉めたりして、その白い頬を紙のようにさらに白くさせた。
「そこまで驚くことじゃあないさ。なんてことはない、ただ僕と４メートル以上離れなければいいだけのことなのだから」
本当になんてことのないように、アゼットは薄い空色の目を細めた。しかし、それに納得できるはずのない少女は、怒りとも焦りともつかない感情で、震える両手を握りしめる。
「そんな問題じゃあないわ！　それってすごく大変なことだもの！　あなたはそれでいいの！？」
「僕は君と離れたところで、また眠りにつくだけだ。むしろ、僕にとってはこの状況は願ってもないものだよ。ただ、精神の相性が悪くて、距離がたった４メートルだなんてガッカリだけれどね。まぁ、そこまで僕も我儘は言わないよ。せっかく、魂の共有者に出会えたのだから」
少女には到底理解できないことを、青年は肩をすくませながら言う。
「君にだけあの現象が起こっているわけではないんだ。君が精神体になっている間、僕の精神は眠る。勿論、眠っている間は体が動くことがないからね。あの場所で倒れていたのはそれが原因なんだ。あぁ、そうだ。あらかじめ言っておくと、君には生きていないように見えるかも知れないけれど、僕はあの状態を眠っている、と表現しているよ」
少女は、アゼットの言葉を噛み砕くことに必死で、その現実を受け入れるのに時間を要した。
精神体、魂の共有者……ネルネにとって、初めて聞く言葉ばかりだった。
「私は、アゼットと離れると、精神体というものになってしまうの？」
「そう。４メートル以上離れるとね。そうして、僕は眠りにつく」

「魂の共有者って、いったいなんのこと？」
「言葉通り、魂を共有する者さ。僕と君がそれにあたるね。僕は不完全な存在なんだ。精神がなくなることはないし、この体も生命活動はしていないけれど、事実、こうやって動くことができる。けれどそれは……」
すらすら説明していた青年が、そこで初めて言葉を詰まらせた。
「精神があっても、僕には魂がない。だから、君の魂に間借りすることで、こうやって動くことができるようになる。けれど、魂の繋がりが断たれると、魂を間借りされた君はその状態では不完全な形となり精神体へ、そして僕は眠りにつく。その距離が４メートルだ」
四本の指を立て、少女に噛み砕くようにして言った。
「ど、どうしてそんなことが！？　私、何もしていないのに！」
少女が魂の共有者になってしまったということを、ネルネは受け入れることができない。
小さな頭を両手で抱え、ネルネは首を横に振り、もう何も見たくないとでも言うように、その深緑の瞳を閉じた。
そのようなネルネの様子にアゼットはひとつ大きな息をついて、机に頬杖をついた。
「それは君が、精霊王に触れたからだよ」
「精霊……王？」
精霊王――　精霊という存在は、妖精と同様、伝承でその名を見たことのあるネルネだったが、精霊王という言葉は、どの伝承にも、物語にも出てきたことがない。つまり、その存在を誰も知らない。
「そう、精霊王の一部に触れただろう？」
「そんなの知らない！　私、なんにも触って……あ、」
ネルネは頭を抱えるまま首を振って否定しようとして、ある事を思い出し、その相貌を開いた。

『精霊王の夢』

少女が気付かずに、しかしいつの間にか抱えていたあの本だ。
思えば、あの本に触れた瞬間から、全てがおかしくなったのだと、ネルネは気付き、青年へと視線を投げる。
「思い出したかい？　この世で精霊王と名のつくものは、全て精霊王の一部なんだ。君はその精霊王の一部に触れて、僕の精神はそれに反応した。魂の共有者となった君の存在を感知して、僕は眠りから覚めて、今ここにいる」
青年は、自分の体に手を当てると、少女に向かって続ける。
「僕はここの下、地下よりも深い場所で眠っていたんだ。三千五百年余りね。僕はひとりでは動けないから、ずっと魂の共有者を待っていたんだよ」
青白い顔で、けれど、その表情は面白いことを見つけた子供のように輝いていた。
「あぁ、君の名前をまだ僕は聞いていなかった。たった数十年だけの付き合いとはいえ、さすがにずっと君では失礼にあたるね。さぁ、君の名前を教えておくれ」
説明は終り、さぁ次の段階へと言うような顔をして、アゼットはその顔を蒼白にしている少女に向かって笑いかけた。

1―6　ひとつの願い

半ば放心状態になっていた少女から名前を聞き出すと、青年は考えた。なぜネルネが、自身の魂の共有者であるのか、と。今もなお、ここまで丁寧に説明したにも関わらず、視線を彷徨わせ、落ち着かない様子で、青年に何度も何度も同じような質問を繰り返すネルネに対し、アゼットは思っていた。

なぜ、このような馬鹿な少女が、自分の半身であるのか、と。

青年は、その空色の目を細めると、漆黒の空に浮かぶ、少女の銀に近い金色の髪の様に光る月に向かって、その目を閉じた。

「今は、とりあえず、アゼットから4メートル以上離れなければいいのね。あぁ、でも、どうしたらいいの……女子寮には男の人は入れないし、アカデミーの授業も……どうしよう」

誰に言うわけでもなく、自分に言い聞かせるようにして頷いたネルネは、次には新しい問題に頭を悩ませていた。その様子を机に頬杖をついて面白そうに観察していた青年は、ここで口を開いた。

「そうそう、僕は君にひとつお願いがあるんだ」

ネルネは、悩むあまり青年の存在を忘れていたので、突然自身に声を掛けてきたことに驚き、その肩をびくりと震わせてアゼットを見上げた。

「お願い？」

「そうだ。僕は三千五百年あまり、ずっとここから離れることが出来なかった。だから、」

ここ、とアゼットは机に人差し指をつき、それから続けた言葉に、どこか夢を見るような顔をしていた。

「どこか遠くへ行きたい」

少女は図書室の扉を背に、肩を怒らせていた。扉の向こう側から、ノックの音が響く。
「ネルネ、いい加減ここを開けてくれないかい？　話はまだ終わっていなかったというのに」
「そんなの知らない！　お願いだからあっちへいって！」
扉の向こうから、青年は、ネルネに聞かせるようにわざとらしいため息をひとつ落とす。
ネルネはアゼットを図書室からそのひょろりとした体を小さい腕で押し出し、扉の鍵を閉めた。青年は抵抗らしい抵抗もしないまま、扉の向こうに追いやられたのだ。
「あっちへと言われても、僕らが4メートル以上離れたらどうなるのか、ネルネも知っているだろう？」
現に、あっちへ行けと言いながらも、その扉から離れることのない少女の行動に、青年は、ネルネが根底ではあるが、自身を取り巻く環境を受け入れ始めていることに気付いていた。
「アゼット、あなたはとても卑怯だわ！」
ネルネは離れられない扉に背をつけ、その足元を見て声を荒げた。
「どうして？」
どうしようもなく我儘な子供に尋ねるような青年の声音に、少女はまたも憤怒した。
「だって、あんなの！」
「僕はただ、君にお願いしただけじゃあないか」
悪びれもしないアゼットに、ネルネは叫ぶ。
「あんなもの、ただの脅迫じゃない！」
青年は、ただただ肩を竦めるだけだった。

少し前のこと。
「どこか遠くへ行きたい」
そう言った青年に、ネルネは首を横に振った。
「そんなの無理よ。だって、私にはアカデミーがあるもの」

「どうして？」
「どうしてって、授業に出なくちゃいけないし、それに、私はまだ子供だもの。父さまと母さまが心配するわ」
ネルネが困惑しながらもそう答えると、青年は少女の瞳をじっと見た後、その視線を流した。
「じゃあ、僕はまた眠りにつくことにするよ」
さらりと、青年はそう言った。
「え？　それって」
青年の言う眠りにつくということは、同時にネルネが精神体になることを意味している。
「どういうこと……」
目を見開いて、青年を見上げる少女に、アゼットはその青白い顔に笑みを浮かべた。
「どうって、言葉通りの意味だよ。だって、せっかく眠りから覚めたのに、君が卒業するまでここに留まらないといけないなんて、詰まらないじゃあないか。だから、君が卒業するまで眠りながら待つことにするよ」
自身が眠りにつけば、少女がアカデミーを卒業することは叶わないと知りながら、青年は少女に優しく、けれど残酷に笑う。
青年は、暗にこう言っているのだ。
――　自分の願いを叶えなければ、君はまたあの現象に怯えることになるよ、と。
普段、のんびりとしているネルネもさすがに怒らないはずがなく、青年を図書室の外へと追い出したのだ。
「脅迫だなんて心外だな。君はただ、僕のそばを離れなければいいだけのことなんだよ？」
青年のその言葉は、出会って何度か聞いた言葉だったが、今さらになって、その言葉の意味を本当に理解し、少女は怒りとともに背筋が凍るような薄ら寒さを感じていた。

「僕はどこか遠くへ行きたいだけなんだ。宛てのない旅なんて、素敵だと思わないかい？」
「無理よ！」
「無理じゃあないさ。君がうんとひとつ頷けば、無理じゃあなくなる」
「そういう問題じゃあないわ！」
「じゃあ、どういう問題なんだい？」
問われて、ネルネは口を噤んだ。行けない理由は、いくつもある。アカデミーを休むわけにはいかないし、よく知りもしない――生きているのかいないのかさえ定かではないアゼットと、宛てのない旅をするだなんて、少女には到底考えられることではなかった。
「そうだね。確かに無理を言っているかもしれないな」
アゼットが、息をついて言った言葉に、ネルネは彼が諦めたのかと少しだけ期待する。
「ネルネにも考える時間が必要だったね。じゃあ、夜が明けるまでの時間をあげよう。よく考えて答えを出すと良い」
続けられた言葉に、アゼットが諦めるつもりはなく、ネルネに決断させることで、少女自身を答えに縛りつけることを意図しているのだと、ネルネは気付き、唇を噛みしめた。

1―7　黒い異変

図書室に少女が籠ってから数十分、疲れと緊張と度重なる到底現実とは思えない出来事に襲われたネルネは、図書室の扉を背に、その場に座り込み、眠気と闘っていた。うつらうつらと舟を漕いでは、頭を振って、無理やりに瞼を開けようとする。何度かそれを繰り返し、少女はとうとう重い瞼を閉じた。

ぐぶりと、何かが潰れるような音がした。少女は、その音と、周囲が急に冷えたことで、肌寒さに肩を震わせながら起きる。

「寒い……あれ？」

一番にネルネの目に入ったのは、夕方、図書室を出た時に見た、あの丸くて大きい、トマトにマーマレードを混ぜた様な色の、あの不思議な夕陽だった。窓の外で、燦々としている夕陽に、少女の目は惹き付けられる

ぐぶり、また音がした。ネルネは、夕陽からまた視線を剥がすようにして、音の鳴る、扉から右奥、閲覧席のある方向を見て、短く悲鳴を上げた。

「あ、あああ、アゼット……あれはなに！？」

同時刻、少女と同じように、扉を背に床に座っていた――　ただし、青年には精神が眠る以外の、睡眠という概念がない。アゼットは、少女の銀に近い金色の髪の様な色をした月を見上げていたのを、ネルネの声によって、扉へと視線を移し、立ち上がった。

「ネルネ？　どうしたんだい？」

「く、黒くて、泥みたいな変なのがいるの！」

真っ黒い、粘着質な泥の様な、大人の男性くらいの大きさの塊が、ぐぶりと耳につく嫌な音をさせながら、夕陽を背に少女の方へゆっくりと、近づいてきていた。

「ここを開けるんだ！」

少女の背に、扉越しに青年が声を上げた。ネルネは、扉にすがりつきながらも、泥の塊から目が離せず、震える指先は焦りと恐怖で、鍵を掠めるばかりだ。開かない扉を諦め、青年は続けて声を投げた。
「ネルネ！　逃げて！　この場から離れるんだ！」
「そ、そんなこと言われても……わ、私、あ、ああ足が、動かないの！」
腰を抜かしたネルネは、その場から動けず、真っ黒い泥の塊を目の前に、ただ震えていることしかできなかった。
アゼットは、ひとつ舌打ちを洩らす。
ぐぶり、真っ黒いその泥の塊は、とうとう少女の目の前にくると、手とも足ともつかない、腕の様なものに、体の様なものと同じく、まるでその体から取り出したような真っ黒い泥の塊を持っていた。
「や、やだ！　お願い！　来ないで――」
少女が頭を抱えて、その身をよじる。怯えるネルネに構うことなく、真っ黒い泥の塊は、その手に持った泥の塊を、ネルネへ投げつけた。
ぐしゃりと、鈍く何かが折れ曲がったような音がした。
ネルネがいた場所に、あの泥の塊は間違いなくぶつかった。その証拠に、扉は爛れた様な焦げ跡を残し、その真ん中が崩れ落ちて穴が開いていた。
「……？」
少女は、あの泥の塊を浴びたにも関わらず、無傷だった。抱えていた自分の頭を触れている感触が消えたことに、ネルネは目を開けて顔を上げた。
「……精神体になってる」
そう、少女は精神体になっていた。そして、そのことが、ネルネがあの泥の塊から逃れられたことの理由だった。
大きい泥の塊は、ぐぶりぐぶりと音を立て、地面に消えていく。いつの間にか、あの夕陽は消え、朝焼けが差し込み始めていた。

少女は、壊れて開かなくなった扉をすり抜け、廊下へと出る。左右を急いで見渡し、少し離れた右の方向に、青年がうつ伏せで倒れているのを見つけ、走り寄った。
「アゼット！」
青年の傍にへたり込み、血の気のない青白い顔を覗き込む。息をしていない、心臓も動いていない青年のその頬に、ネルネは恐る恐る手をあてた。冷たい感触が、少女がもう精神体でなくなったことを実感させる。
「アゼット！　起きて！」
「……今回は、僕の体には乗らないのだね」
目を開け、青年は苦笑すると、その場に胡坐をかいて、ネルネに向き合う。
「起きてくれてよかった。息もしていないし、心臓も動いていないから、このまま起きないかもしれないって思ったわ」
「心外だな。僕は、始めから言っているだろう？　眠りについているって。起きない眠りなんて、ないんだよ」
生きていない、とネルネはずっと思っていた。けれど、それは違っていたのだと、少女は触れた冷たさに考えを改める。
「助けてくれたんだよね。ありがとう」
青年は、自身が少女から４メートル離れることで、あの場を離れることができなかったネルネを精神体へと変え、あの泥の塊から助けたのだ。
「いえ、どういたしまして。とはいえ、僕は眠っていただけで、何もしていないけれどね」
朝焼けの中、少女はあの夕陽と、黒い泥の塊について青年に尋ねるまで、少しだけ、青年との初めての穏やかな時間に、余韻を残した。

1―8　どこか遠くへ

突如、少女を襲った黒い泥の塊の消えていった場所は、いつも綺麗に磨かれている床で、壊された扉にも、扉の欠片が散らばるだけで、投げつけられた黒い泥の汚れや痕跡が、微塵も残っていなかった。

「あれは……一体何だったの？」

茫然と、壊された扉を見つめ、ネルネは呟いた。

少女がアカデミーで度々見る自然の力を利用した魔道や、人の体の中に潜在している能力を利用した法術とも違う、なんとも不思議な気持ちの悪いものだった。

「君が夕陽だと思っていたものは、精霊の世界の月だ。そして、君の見た黒い泥の塊……精霊王の眷属だね」

「精霊王の……？」

青年は、少しだけ苦々しい表情をしたけれど、すぐにまた飄々とした顔に戻る。

「君が精霊王の一部に触れたことで、君は精霊王と本来あるはずのない繋がりを持ってしまった。その結果、精霊王が精霊王であるという均衡を、たった君という存在で崩してしまったんだ」

少女は、青年の言っている意味をよく飲みこめず、眉を潜めてアゼットを見上げた。

「それって、すごいことなの？」

「凄い、というよりは厄介だね。精霊王は崩れた均衡を正そうとしている」

「正すってどうやって？」

飄々と話す青年に深刻さは感じられず、ネルネは浮かぶ疑問を、ただ口にする。

「君という存在を消すことだよ」

少女はその言葉に、喉がひゅっと音を立てた。

あの黒い塊は、精霊王の眷属で、夕陽の様なあの月を背に、少女の存在を消そうとしている。突き付けられた現実に、ネルネは目を見張って、顔を俯けた。
「そこまで気にするものじゃあないよ。精霊の月の日には精神体になっていれば良いだけだよ。今回は僕も目覚めた興奮ですっかり忘れていたんだ。君が精霊王の一部に触れた後のことをね」
「精霊の月の日……」
「そう、人間世界とは違ってね。こっちの暦で数えると、ひいふうみい……うん。ひと月に三回くらいあるだけだよ」
「十分多いよ！」
思わずといった風に、ネルネが声を上げて、その勢いのまま、少女は続けた。
「それに、ずっと続くわけでしょう？　私、決めた！」
顔を俯けながら、制服の裾を握り、少女はあの恐怖に向き合おうとしていた。ずっと怯えたままで、ずっと平穏がないだなんて、のんびりと暮していた少女には考えられないのだ。
「私、精霊王に直接会って、諦めてもらうように頼んでみる！」
ネルネにとってみれば、精霊王のしていることは、ガンタン少年が少女に意地悪しているものと同等なのだ。だから、説得すればやめてもらえると、子供の理論で考えた。しかし、それに水を差すのは、見た目は二十代半ばだが、実年齢は三千を超えている、いい大人であるアゼットの役目である。
「どうやって？」
普段のネルネなら、そこで引いてしまったかもしれない。けれど、今の少女は自身より数十センチも高い青年を見上げ、その強い深緑の瞳を逸らすことはなかった。
「アゼット、あなた、知っているんでしょう？」
「精霊王は、人がとてもとても嫌いだ」
青年はあるはずのない息を吐く真似をし、肩を落とした。
「君みたいな、何の力も持っていないような子供が、精霊王の前に

ノコノコ現れたりしたら、またたきをする間に、君はこの世から消えてしまうよ」
　声音を変え、しぐさをつけ、青年は少女に恐怖を植え付けようとする。けれど少女は、それでも目を逸らさない。
「今だって同じことだわ。何も変わらないの。嫌いだから意地悪をするの？　それって間違ってる。とても嫌なことだもの」
　諦めたように肩をすくめた青年は、しぶしぶと口を開く。けれど、その裏にはやはり飄々とした様子が見られる。
「精霊王の一部を探して、全てに触れれば、君は精霊王に会えるよ」
「精霊王の一部？　それって、あの『精霊王の夢』の様なもの？」
　青年は、頷きもせず、首を振りもしない。
「どんな姿でもありうる……かな。ただ、精霊王の一部に触れるということは、均衡を崩し、君が精霊王に近くなることを意味する。とても危険だね。それに、会えたところで君が精霊王を説得できるとも思えない」
　青年の忠告に、ネルネは少しだけ怯んだ。朝焼けは、あの精霊の月にも似て、ネルネの顔を照らし続ける。
「精霊王に近くなれば近くなるほど、君を襲うものはあんなものじゃあなくなる」
　真っ黒い泥の塊、耳につくあの気持ちの悪い音を立てて、少女を襲う。それ以上のものが？　ネルネは想像して、そして口の端を結んだ後、息を上げた。
　これはネルネの勇気を振り絞るために、自分で決めなければならないことだった。すぐそこに答えがあって、少女はそれを掴むだけでいい。
「私、精霊王を見つけたいの。会ったら、一番に言うわ。意地悪なんてしないで、友達になりましょうって」
　脅しても慰めても揺らがない、まるで子供の理論を振りかざす少女に、青年はとうとう両手を顔の横に上げた。
「まぁ、良いさ。理由はどうあれ、どこか遠くへ行けるのなら、僕

はそれで良い。精霊王の一部なんて、そう簡単に見つかるものでもないからね。僕は、君がどこまで行くのか、見届け人となるよ」

どこか遠くへ行きたい

誰でも一度はそう思ったことがあるにちがいない。でも、実際に行動に移して、本当に遠くへ行く人は、ほんの一握りだ。

たとえば、そこにひとつ言葉を付け加えるとする。

「どこか遠くへ行きたい。どこか遠くにある、精霊王の居る場所へ」

少女の物語は、今、幕を開けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2373t/

どこか遠くへ

2011年5月21日21時57分発行